

## ギャロン・チベット族の年中行事と芸能

松岡 正子<sup>※</sup>、高山 茂<sup>※※</sup>

### 1. 問題の所在

ギャロン（嘉絨）・チベット（藏）族<sup>1)</sup>とは、中国・四川省西北部の高山峡谷地帯に定住し、農業を営む人々である。人口は約10万人、その大部分は大渡江（長江系）上流域に位置する阿壩藏族羌族自治州の馬爾康・金川・小金および理県の4県に集中する。

ギャロン・チベット族は、言語や歴史、風俗習慣などにおいて若干「異質」な面をもつチベット人<sup>2)</sup>である。「異質」とは、次のような側面をいう。

第1は、彼らの言語である。ギャロン語は、チベット族の言語の中でも特異な存在としてこれまで内外の研究者の注目を集めており、以下のような論が展開されてきた。

ギャロン語は、ギャロン・チベット族の用いるチベット・ビルマ（TB）系の言語で、これまで「チベット語に系統的に最も近いことば、或いはチベット語の古形を保つことば」と見做されてきた<sup>3)</sup>。しかし長野 [1984] は、ギャロン語を、チベット語群、イ・ミャンマー語群、チン語群、ボド・ナガ語群の4つに系統分類されるTB諸語において「これらの4語群のいずれにも帰属せず」「語の形式、形態手続、統辞法の全て又は一部が（語群間の）複数のグループと対応する等、様々の仕方と程度において語群間の歴史的橋渡し役を演ずる媒介言語（link language）である」とする<sup>4)</sup>。これに対して中国の研究者は、長野説ではギャロン語とともに媒介言語とされたチャン語をチベット語と同格の語群のひとつとしてとりあげ、四川省内のTB諸語を、チベット語群、イ語群、チャン（羌）語群の3つに系統分類し、ギャロン語をチャン語群に属するとする<sup>5)</sup>。さらに孫宏開 [1983] は、チャン語群を中心とした「チャン語系言語」というものを想定し、歴史的にみてそれが四川省西部の「六江流域」に暮らす複数のチベット族の共通祖語ではないかと推測する。

六江流域とは、四川・雲南・西藏の3省が接する高山の峡谷地帯を南北に流れる6大河の流域をいい、四川省内には、東から岷江・大渡河・雅砻江・金沙江の4河川が流れている。ここは、かつて様々な民族が移動と接触を繰り返した歴史上の重要な「民族走廊区」<sup>7)</sup>であり、吐蕃国の東進によってチベット化される以前には、「某羌」と称される羌系の民族が広く分布していた。そのために現在この一帯に居住するギャロン・アールゴン・クイリヤン・ミニヤック・ナムイ等のチベット族と総称される複数の民族集団とチャン族の間には、羌系ともいえるべき共通文化の存在が想定されている<sup>8)</sup>。孫説の「チャン語系言語」とは、この共通文化の一つと考えられるものであり、ギャロン人の言語の特異性もこのような歴史に負うところが大きい。

※ 鶴見大学文学部講師

※※ 早稲田大学文学部講師

第2は、その歴史である。前述のように、ギャロン人は「六江流域」の先住民であったと考えられるが、チベット族によって伝えられたチベット仏教が浸透するにともない、様々な面でチベット化していった。しかしその一方で元・明・清代には、チベット側の勢力衰退のために政治的には中国王朝の間接統治下に入れられ、「土司制度」<sup>9)</sup>が行われた。さらに清代中期の「金川事変」<sup>10)</sup>では、大金県の土司サラホンが清王朝と約30年間戦い、敗北した。その結果、中国側の政治、経済上の支配は一層強まり、大金県に居住するギャロン人は、当時7万人といわれた人口が数千まで激減し、河谷の肥沃な土地には多数の漢族の移住者が送り込まれた。そして居住区の最も東に位置していた理県は、清王朝に任命されたチャン族の土司の支配下に入れられ、五つの屯区<sup>11)</sup>に編成された。このようにしてギャロン人は、チベット族と漢族という二つの巨大な民族のはざまにあって両者から交互に政治的支配をうけ続け、チベット人の中でも最も漢族と接触した集団の一つとなった。

第3は、文化における重層性である。ギャロン人は、チベット仏教を深く信仰したために、彼らの文化には、本来の固有の要素のほかにチベット仏教による影響が顕著であり、また漢族やチャン族の政治的支配をうけたためにその影響もみられる。なかでも自然環境や生業ばかりでなく、宗教や政治などとも関わる年中行事においては、民族間相互の交流や影響が顕著に表われている。またチベット仏教の浸透は、彼らの芸能にも極めて大きな影響を与えてきた。

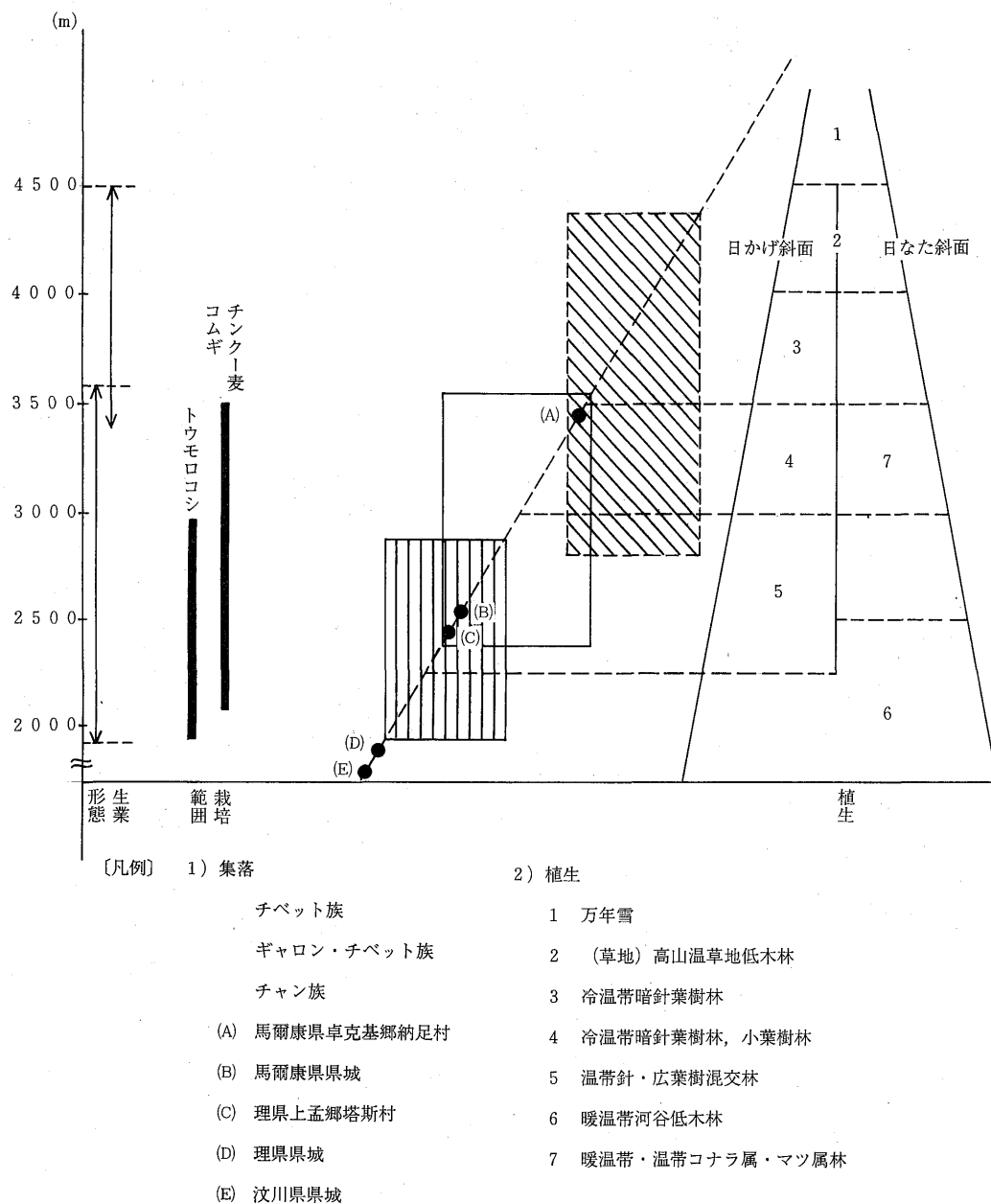
そこで本稿では、特にギャロン・チベット族（以下ギャロン人と記す）の年中行事と芸能をとりあげ、文化における伝統の維持と変化の様相を明らかにしていきたい。

## 2. ギャロン地区の概況

青藏高原の東端に位置する四川省西北部には、現在、チベット族・チャン族・漢族・回族などの異なる複数の民族集団が、互いに隣接しながら高度差による住み分けを行い、各集団が独立した集落を形成している（図1）。すなわち、4000メートルを越える山々や深い峡谷からなる地形の中に、高度1000メートル前後の河谷の街道沿いには、漢族や回族が町を形成している。一方、高度2000メートルから3500メートル前後までの山間部には、東側から順に、チャン族・ギャロン人・チベット族がチンクー麦、小麦、トウモロコシなどを栽培する農業を営んでいる。さらに高度4000メートル以上の草原地帯では、遊牧に従事するチベット族がヤクやメンヨウなどを放牧して移動生活を行っている。

このうちギャロン地区は、その民族構成と他民族との関係から次のように大別される。①現在に至るまで住民のほとんどがギャロン人で占められ、最も伝統的な風習を残しているとみられる「四土」地区（現在の馬爾康県）。②元来は純ギャロン地区であったのが、清代中期の「金川事変」以後、大量の漢族移民の流入のために人口の70～80%を漢族が占めるようになり、多方面において漢族の影響がみられる「金川」地区（現在の金川・小金県）。ただし移民としてやってきた漢族は自分たちだけの村を新たに作成し、県城以外でギャロン人と同じ集落に住むことはあまりない。③ギャロン地区の最も東に位置してチャン族や漢族と隣接し、古くから漢族地区との経済的

〔図1〕 四川省のチャン族・ギャロンチベット族・チベット族の分布と生業



〔出典〕 姜怒「四川西部・雲南北部地域における自然地理の垂直分帯と水平文化」(『中国地理学会1962年自然区画シンポジウム論文集』科学出版社, p. 111, 1964) より。

な結び付きをもつ理県や汶川県、である。

ギャロン人の生業は、河谷に定住して営む農業である。以下では典型的な生業形態を示す「四土」地区の馬爾康県卓克基郷と「五屯」地区の理県上孟郷の事例について、その特徴を検討する。馬爾康県は、かつて梭磨・卓克基・松崗・党霸の4つの土司によって統治されていた地区で、他の地域に比べて漢族との恒常的な接触が少なかったため、様々な面でギャロン人の伝統的な側面が保持されている。これに対して理県は、位置的に漢族やチャン族と常に接触し、多方面に周辺民族の影響がみられる。なかでも上孟郷は、チベット仏教ニンマ派に深く帰依する一方で、山一つを隔ててチャン族とも接し、漢族地区への出稼ぎも盛んに行われた。

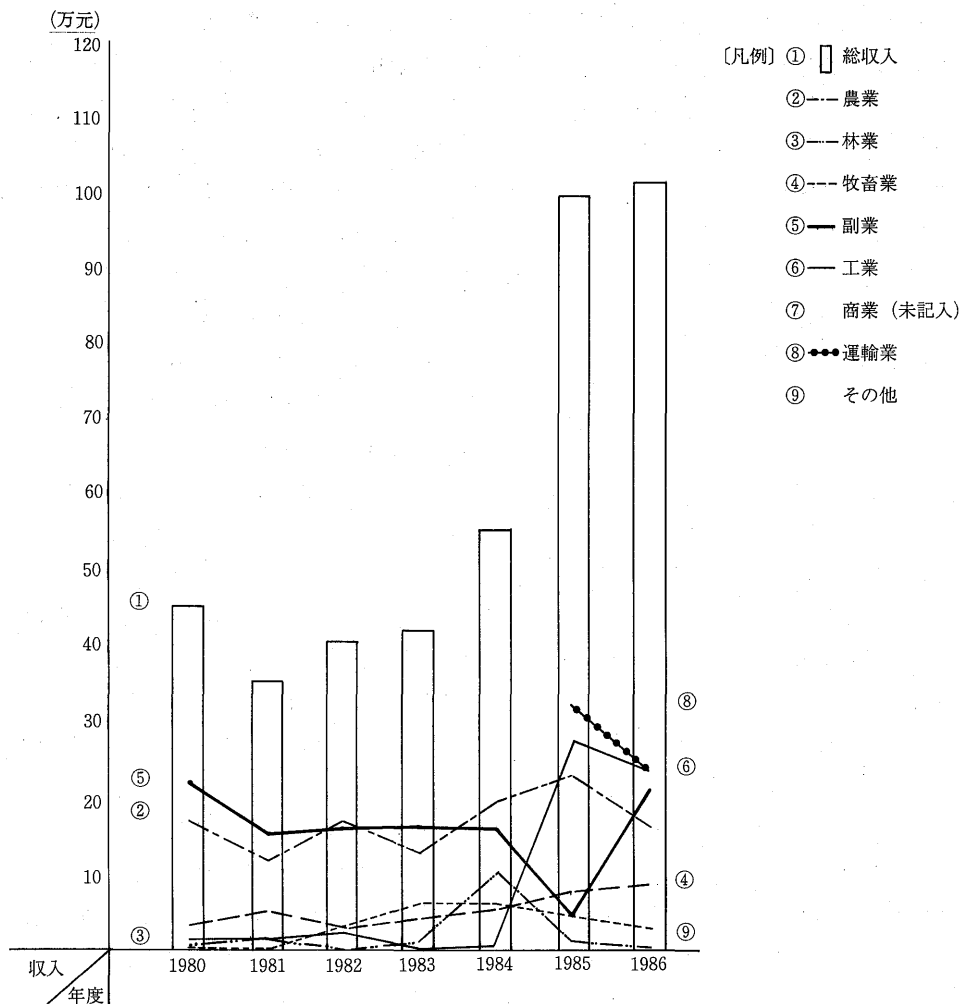
卓克基郷<sup>12)</sup>の概況は次のようである。郷は、馬爾康県の県城<sup>13)</sup>から東に約7キロ、大渡河上流の梭磨河に沿った峡谷地帯に位置する。海拔高度はおよそ2700から3300メートル、総面積は482925畝（1畝は6.67アール）で、うち耕地が3000畝、放牧用の草場が数千畝、残りの大部分がスギ・マツなどの原生林である。全郷は、戸数272戸、人口約1300人で、西梭（101戸／389人）・査米（111戸／457人）・納足（60戸／304人）の3つの行政村からなり、さらにそれぞれが2つ、3つ、3つの村民小組に分かれる。民族構成はギャロン人が95パーセント、漢族が5パーセントで、ほぼ完全な純ギャロン人地区である。

郷の経済状況は、1986年度の一人当たりの総収入が約894.43円で、経済的にたち遅れた四川西北部では富裕な方である<sup>14)</sup>。ただし1980年から1986年までの生業別の収入の変化をみると、豊かになってきたのは生産責任制が定着し始めた1985年以降である（図2）。またその内容をみると農業部門の収入がほぼ横ばいであるのに対し、収入増のほとんどは農村工業や運輸業によるものである<sup>15)</sup>。

〔図3〕は、郷内で最も古い集落である納足村の典型的な家庭の状況を示す。ヤジムシェン家<sup>16)</sup>は住民の大部分を占める専業農家の例で、イリン家は近年運輸業を始めて急速に富裕になってきた例である。両家とも農業生産などにおいてはほとんど違いはなく、自給自足型を脱していない。農作物は基本的に自家用で、胡豆・小麦・チンクー麦を年ごとに輪作し、チンクー麦<sup>17)</sup>は酒用にする。東隣のチャン族地区では盛んに栽培されて特産物ともなっているサンショウ<sup>18)</sup>などの商品作物はほとんど栽培されていない。家畜はヤクが主で、両家とも20～30頭を飼い、自家用の酥油をとり、毛や皮や肉を利用する。また「養牛為耕田、養猪為過年、養鶏為了幾個零花錢」という伝統的な観念が強いために、西に僅かに7キロしか離れていない県城へ肉や鶏卵を出荷することもほとんどない。ヤジムシェン家の主要な経済収入は昔ながらの漢方薬材<sup>19)</sup>の採集で、時にはヤクを売る。これに対してイリン家は、余剰の成人労働力をトラックによる長距離運輸にあて、1万円を越える収入を得ていると噂されている。

一方、理県上孟郷における生業も、卓克基と基本的には同様の傾向がみられる。上孟郷は、総戸数447戸、総人口2449人で、日波（79戸／415人）、木尼（97戸／415人）、塔斯（144戸／902人）、日東（37戸／224人）、木葉（90戸／493戸）の5つの行政村からなる。住民はほぼ全員がギャロン人である<sup>20)</sup>。海拔高度はおよそ2200～3000メートルで、豊富な森林資源があり、郷内には郷

〔図2〕 近年における卓克基郷の生業別の収入の変化



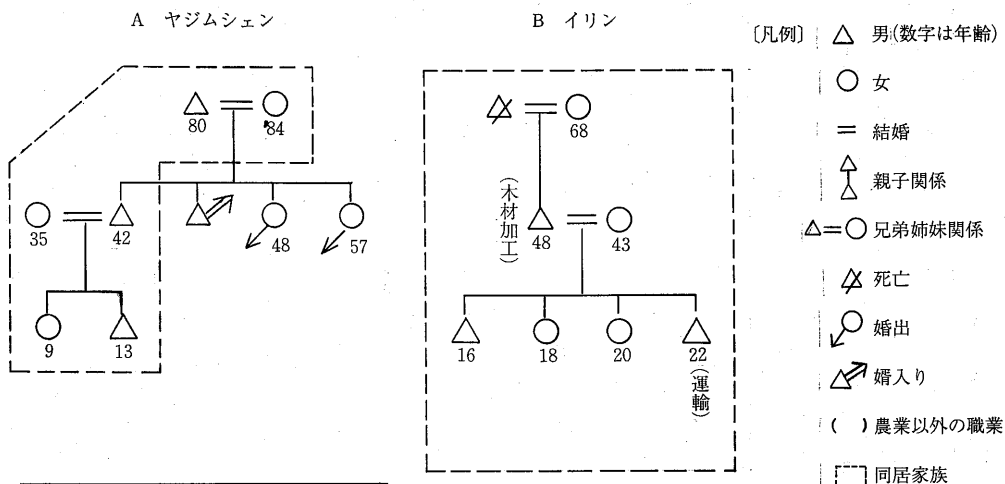
〔註〕 1) 運輸業と商業は1984年以前は専業者がいない。

2) 商業収入は85年度0.91万元, 86年度0.69万元。

〔出所〕「馬爾康県卓克基郷社会経済調査」(民族論叢1986-6)より作成。

経営の木材加工場が、木材を都市に運ぶための私有のトラックが15台あり、近年は運搬業による収入の伸びが著しい。しかし大部分の住民は、自給自足型の専業農家である。平均的な専業農民である塔斯村の雷清の場合は、一男一女と母の4人家族で5畝の畑を所有し、主に主食であるトウモロコシを栽培している。家畜は、犏牛（ヤクと黄牛の交配牛）2頭（他家と共用）、豚2頭、鶏3羽で、牛は農耕用、他は自家消費用として飼育している。1991年の現金収入は、3000元余りで、4月から8月までは虫草や貝母、羌活などの漢方薬材の採集に出かけ、合間に木材伐採の仕事をした。

〔図3〕 ヤジムシェン家とイリン家の家族構成と経済状況



	ヤジムシェン	イリン
畑 (畝)	14	17
家畜 (頭)	ヤ 28 ク 5 牛 3 ブ 3 タ	24 4 2
1) 副業 (元)	500	0
2) 運輸業 (元)	0	10,000以上 (トラック所有)
3) 工業 (元)	0	数百元 (?)

- 〔註〕 1) 副業は漢方薬材採集やマツタケ採りなど。
- 2) 運輸業は専業で大型トラック所有者。
- 3) 工業は個人・郷・村の経営による木材加工場など。

〔出所〕 1991年の現地での聞き取りによる。

以上のように、生業においては、農業生産や家畜の飼育は自給自足を原則とするという伝統的な意識が根強い<sup>21)</sup>。しかし副業部門では、従来の漢方薬材採集よりも、新しい職種である運輸や工場労働を行う者のほうが収入増加が著しく、これまで経済的にほぼ一様であった住民間に大きな貧富の差が生み出されようとしている。

#### 4. 年中行事

〔表1〕はギャロン地区の地域別の主要な年中行事、及び周辺の阿壩州のチベット族や灌県の漢族、理県のチャン族のそれを示したものである。

年中行事においてギャロン地区全体に共通する要素は、以下のように整理できる。

①ほぼ全地域において、時期は一定していないが、集落全体で「揪煙煙 (祭山神)」が実施される。

②「揪煙煙」では、祀る対象は集落の山の神であり、各集落の神山の山頂や神林で、柏香樹を燃やして煙りをあげる儀式が行われる。山頂や神林には、石を積みあげた高さ1～2メートルの塔「クルジ」(後述)がある。卓克基郷の住民によれば、柏香樹の煙は、「クルジ」の周辺を淨め

〔表1〕ギャロン・チベット族と周辺の諸民族の年中行事

民族・地名 月 (旧暦)	ギャロン・チベット族						ナムイ・チベット族		チャン族		阿壩州のチベット族		漢族
	馬爾康県 卓克基郷	馬爾康県 松崗郷	馬爾康県 党壩郷	大金県	小金県 結思郷	理上郷	汶川県 (草坡郷)	冕寧県 聊合郷	理普溪郷	農区	牧畜区	農業区	灌区
(月)													
1		春節		春節	春節	春節	春節	春節	春節		蔵暦 一五	年	春節
2		啞叭会	祭山神 三二八	上九会 9	祭山神	廟会 15	祭山神 9	祭山神	祭白石神 8		蔵暦 二七		
3				天灯又 15	祭山王 15	祭山王 15	要龍灯 10		ガル				
4	祭山神	打叉又		清明	祭山神	清明節 13	祭山王 13	祭山会 6	観音会 19		念“咪呢經” 11		清明節
5				祭山神 13	念經 五二七	廟会 5	端陽節 5	端陽節	端午節		登堡		5 端午節
6				啞叭会 13	念經 五二七	啞叭会 5	端陽節 6	火把節	観音会 19				13 半刀会 祭楊将軍 秋苗会
7	看花節			啞叭会 4	三聖会 23	鬼節 15	鬼節 15	火把節	祭青苗 7		8 廟会 (跳神)		7 乞巧 15 中元会
8				祭山神 一〇	祭山神 一〇	鬼節 15	牛王会 30	火把節	土地神 15				15 中秋節
9				三聖会 一〇	念經 一〇	中秋節 15	中秋節 15		鬼節 15				15 中秋節
10				念經 一〇	過年 13	牛王節 1	中秋節 15		観音会 19				9 重陽節
11	7 廟会	21 喇嘛会	13 過年	念經 13	過年 13	牛王節 1	牛王節 1	祭山会	メルメ 1				1 牛王誕
12	13 糌粑年	28 糌粑年		過念 13	廟会 五二〇	過小念 21	臘八粥 8		牛王会				長陽節
						臘八粥 8	臘八粥 8				20 燃灯節 29 廟会 (跳神)		8 臘八粥 23 送火土
備考*	□は山の 神まつり		「日角爾都」 神 「阿美日客」 神					「旦那俄拔」 神山					

〔出所〕 1991年の現地での聞きとり，「草地社会情况調査」・「嘉減藏族社会情况調査」（以上『四川省阿壩州藏族社会歴史調査』）  
「冕寧県聯合公社藏族社会歴史調査」（『雅砻江下游考察報告』），「増修灌県志」などより作成。

て聖域を明らかにするとともに、神はこの煙にそって天界と山界、及び人間界を移動するのだという。

③「揪煙煙」の行われる時期は地域によって異なり、正月、2月～3月、4月～5月、7月などがある。このうち2～3月は春の耕作の前後、4～5月は苞や風雨の被害を受けやすい時期、7月は主食であるチンクー麦の収穫期であり、この儀礼が山間の農耕活動に深く関わるものであることを示している。

④山間での農業や家畜の飼育、及び山の資源を利用した漢方薬材採集は、彼らの生活の中心である。そのためそれに深く関わる「揪煙煙」は、ギャロン人が伝統的に実施してきた最も盛んな儀礼の一つである。

⑤ギャロン人の伝統的な「過年（新年迎え）」は、11月である。例えば1991年に理県上孟郷塔斯村では11月13日であった。住民はその数日前までに屋内を清めて一年間のけがれを払い、一家が集まって年越しをする。年越しの時には御馳走を作り、とくに豚の乾燥肉やチンクー酒を用意して親類を招き合い、歌い踊る。また正月の15日には寺院の廊会が開かれ、「跳神」の踊りがラマ僧によって演じられる。これに対して阿壩州の他のチベット族は、チベット暦による正月を行う。これをチベット語では「ロサル」、漢語では「蔵暦年」という。「蔵暦年」は農業区よりも牧畜区のチベット族で盛んに行われ、その期日は、かつて民間では各地の寺院が「黒白算法」によって決めていたが、1951年以降は蔵暦が漢族の農暦に近いことから、漢族の春節をそのまま「蔵暦年」にあてはめるようになったという<sup>22)</sup>。ギャロン人は、11月の「過年」を「小過年」、1月の「大過年」と区別するが、現在では1月が盛んである。このようにギャロン人も含めたチベット地区では、蔵暦と農暦の近似のために、「過年」における期日的なずれはほとんどない。またギャロン人の正月には、理県のように漢族地区に隣接した地域においては、本来は漢族の春節の風習である「獅子舞」や「龍灯」も盛んに行われている。

⑥チベット仏教は、ギャロン人の年中行事にも大きな影響を与えてきた。かつてギャロン人の習慣では、息子をラマ僧にすることは光栄であると考えられており、複数の男子がいた場合には必ず1人或いはそれ以上を寺院に出し、1人しかいない場合でもラマ僧に出して、娘に婿をとることがよく行われていた。例えば1950年代の卓克基では、ほぼ各戸に1人の割合でラマ僧を出し、その総数は全人口の5分の1を占めていた<sup>23)</sup>。また寺院で開催される廟会は、住民の娯楽の場でもあった。そこではしばしばラマ僧による宗教舞踊「跳神」（後述）が演じられた。例えば理県の上孟郷にあるニンマ派のガンガン寺院の場合は、1980年代に入ってからようやく1月と4月の廟会が復活した。かつてギャロン地区ではチベット仏教への信仰が極めて深く、各寺院ではほぼ月ごとに廟会が開かれ、特に1月、4月、7月は盛んであったという<sup>24)</sup>。現在ではかつてのような絶対的な従属と信頼は薄くなったものの、老人を中心としてその信仰はなお根強い。また集落内では、病気の治癒や災害の駆除、個人の冠婚葬祭から集団の年中行事に至るまでの様々な場面にラマ僧が招かれている。

次にギャロン地区における年中行事の地域差について述べる。ギャロン地区の行事には、内容



からみて、ギャロン人が伝統的に実施してきたもの、チベット仏教の影響をうけたもの、漢族の影響が認められるもの、チャン族との関連がみられるものなどの4つの要素がある。このうちギャロンのものやチベット仏教の影響は、前述のようにギャンロ地区全体に共通点として表れる。これに対して漢族的なものやチャン族的なものは、漢族やチャン族との接触の多かった大金県や理県、汶川県などに限ってみられる。すなわち位置的に漢族地区に近く、古くから出稼ぎなどで漢族との接触が頻繁であった理県や汶川県、金川事変以降に多数の漢族移民を受け入れた大金県においては、その他の地域ではみられない漢族の年中行事が行われており、それが年中行事における大きな地域差となっている。

例えば理県上孟郷塔斯村の場合は以下のようなものである。1月は春節期間で、1カ月間休む。御馳走を用意して親戚知人で招きあうほか、漢族の風習である「獅子舞」が繰出し、「龍灯」が飾られる。15日には郷内のニンマ派のガンガン寺で廟会があり、住民は供物を用意して参詣に行き、ラマ僧によって演じられる「跳神」を見物する。廟会の出し物には、村ごとに出された「獅子舞」も参加する。30日には「送年」がある。屋上の「クルジ」や家屋の入り口、井炉裏、神棚などの場所で柏香樹を燃やして煙りを上げ、新年の初めに招いた神々を送る。「送年」は理県蒲溪郷のチャン族でも行われている。これで正月が終わる。2月15日と3月13日には、山王廟で「揪煙煙」を行う。穀物の豊饒を祈るとともに、出稼ぎにでた者たちの無事と早期の帰郷を願う。3月2日は清明節である。4月の8日から10日まではガンガン寺の廟会がある。全郷の住民が参詣に訪れ、年間を通じて最も盛大な行事となる。連日、ラマ僧が読経を行い、「跳神」が演じられる。「跳神」には2人、4人、8人、10人、28人の別があり、最終日に最も完全な内容が演じられる。4月には「啞巴会」<sup>25)</sup>もある。いわゆる断食の行である。隠徳を積み、父母に孝養を尽くし、神の下す災いから逃れることを目的とする。4月以外にも正月など年に2、3回行われる。期日は老人が決める。参加者は、1日目は精進料理のみを口にし、人と談笑することも自由であるが、2日目は食べたり飲んだりしてはならず、人と口をきくこともできない。3日目は普通にもどる。5月5日は「端陽節」、7月15日は「鬼節」、8月15日は「中秋節」である。これらはすべて本来は漢族の行事であり、その内容も漢族の風習をほとんどそのまま踏襲するが、春節やガンガン寺の廟会「啞巴会」ほど盛んではない。10月1日は「牛王節」である。これはもともと四川省の漢族地区の農村で広く行われていた風習で、牛に特別な食物を与え、一日間自由に放って一年間の農耕における牛の労働をねぎらう。理県のチャン族にもみられる<sup>26)</sup>。上孟郷では、ヤギやオンドリを犠牲にして牛王神に捧げる。このような家畜の犠牲は、漢族の風習の中にはなく、チベット仏教でも殺生を禁じており、周辺民族の中ではチャン族において特徴的な祭祀法である<sup>27)</sup>。11月13日は「蔵暦年」である(既述)。このように理県上孟郷の年中行事には、民族本来の行事に加えて、チベット仏教的、漢族的、チャン族的とみられる要素が導入されているようすが明らかである。

以上のことからギャロン人の年中行事については、次のように考えられる。チベット仏教の影響は、全ギャロン地区において共通して深く浸透しており、ギャロン本来の行事との区別が困難

と思えるほどである。しかしその中で「揪煙煙」の儀礼は、以上述べてきたように、彼らがチベット仏教伝播以前から抱いてきた山に対する畏敬に基づく民族本来の儀礼であろうと。

## 5. 「揪煙煙」と「クルジ」

ギャロン人の伝統的な年中行事は、前章にも示したように、「揪煙煙」における山の神まつりである。本章では「揪煙煙」の儀礼の意味や形式などから、その特徴を明らかにしていく。

〔図4〕は、馬爾康県卓克基郷納足村の「呻金木先」における儀礼と農業暦の関係を示したものである。納足村では、3～4月初め、春の種蒔きが終わった後の一日を選んで、その日の早朝に村人達が神山に上り、山頂の塔の前で、柏樹を燃やして天にむかって煙をあげる「揪煙煙」の儀礼を行う。また日常的には、毎月15日と30日の早朝に、各家ごとに、家屋屋上の塔「クルジ」（後述）の前で、清めた小麦粉を供え、柏香樹を燃やして煙をあげ、山の神の加護を祈る。家族や家畜の病氣治癒や何か不吉な事がおきた時にも、「クルジ」の前でその助けを乞うという。このように山の神まつりは、生業と深く関わって村の農作物の豊作を祈るばかりでなく、家庭内の災難や病気を除き、守護を願うという大切な意味をもっていた。

〔図4〕 農業暦と主要儀礼

*1 農 業 暦  作 物 名	(月)												栽培面積 (畝)	収穫量 (斤)
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
小 麦				播種				収穫					5	2750
胡 豆													7	4100
*2 ジャガイモ														4600
チンクー麦													2	1100
主 要 儀 礼	(月)													
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
	春節			祭山神				看花節			廟会	糌粑年		

〔註〕 \*1：農業暦は、馬爾康県卓克基郷納足村の呻金木先の例（1991年）。月はすべて旧暦。

\*2：ジャガイモは胡豆との間作，胡豆1斤と米1斤を交換する。

〔出所〕 納足村でのききとりによる（1991年）。

「揪煙煙」は、このような山の神まつりの中心的な儀礼である。しかしそれはギャロン人固有の儀礼ではなく、周辺のチャン族やチベット族などの山の神まつりでも広く行われてきたものである（表1）。山口瑞鳳〔1988〕はこれについて次のようにのべる<sup>28)</sup>。チベット人は、チベット

仏教を信仰する以前から山神、地神を供養するための「烟祭」という儀礼を行っており、それを「サン」とよぶ。チベット仏教のゲルク派において5月15日に行われる「ザムリン・チサン」は、「朝に香をたいて神々に供養し、その後は、野外にテントを張ってピクニックをする」ものであるが、これは「サン」に由来し、「烟祭」が「仏教の薫香の儀と重なり、語義に『浄化』の意味があったところから今日まで広く行なわれてきた」と。

ところでこれらの民族で行われてきた「烟祭」の儀礼には、大きな共通点がみられる。祭場に築かれた石の塔である。これをギャロン人は「クルジ」とよぶ。

〔表2〕は、ギャロン地区の各県の山の神まつりの概要である。これによれば祭場には2種類ある。一つは、各集落の神山の山頂あるいは神林の広場にあつて集落全体の儀礼を行い、いま一つは、各家の屋上にあつて家ごとのそれを行う。

「クルジ」は、山頂・広場・屋上などの祭場に祭壇として設けられた石塔である。各地域にみられる「クルジ」はほぼ同様の形状をもつ。馬爾康県卓克基郷納足村の呻金木先家の「クルジ」は次のようである。高さ約100センチ、底幅80～90センチ四方の塔で、小さな石を積み上げて作る。頂上には山中の未踏の地から運んできた白石を置き、下部には柏樹を燃やすための凹部がある。村内には、クルジの後部に山羊や鶏の毛を結びつけた木の枝を挿したり、タルチョ（経文を書いた色とりどりの旗を繋いだもの）をはためかせたりしたものもある。白石は、屋上の四隅にも山型に積み上げられている。住民の話では、山頂にも同型の石塔があるという。また党壩郷では、山頂には「クルジ」に似た「嘛尼堆（マニツィ）」<sup>29)</sup>があつて、家ごとに先端に馬や鶏の毛をつけた木の枝を用意し、山の神まつりの時にそこに挿すという。

川西南チベット族の一集団であるナムイ人<sup>30)</sup>地区では、山上の祭壇を「アルプ」とよぶ。山の神まつりを行うタナウパ山のその形状は、納足村のクルジに似ている。アルプは、高さ約1メートルの石塔で、頂上には人跡未踏の山奥から運んできたという3個（5或いは7個）の奇数の白石を並べ、屋上の両端に掛けわたした綿羊の毛製の縄に紅・緑・白・藍・紫の布をかける。また同様のアルプが山道の崖口にもある。山の神まつりの時にはヤクや綿羊の毛を結んだ木の枝をそこに挿し、柏樹を燃やして祀り、ふだん付近を通る者は必ずこの塚に石を積むのだという<sup>31)</sup>。

チャン族においては、石塔は「ラシ」とよばれる<sup>32)</sup>。「ラシ」は、高さ約2メートル、下方には柏香樹を燃やすための凹部があり、頂上には「ウルピ（白石）」を1個ないしは奇数個置き、その下方に犠牲にしたヤギの角を供える。また「ラシ」の裏側には4～5メートルの「ラ（杉の枝ないしは竹枝）」を挿す。「ラ」も「ウルピ」も神聖なものであり、かつてそれを切出したり運ぶには厳格なきまりがあつた。ともに神が憑依し、神を表象するものとみなされている。またウルピは家屋の屋上にあつて家神を表すとされ、「ラ」は山の神まつりの間は山頂の「ラシ」に挿され、祭りが終わると、それを各戸が持ち帰って自分の畑に1年間挿しておく。このような祭壇の木の枝を畑に挿す儀礼は、ギャロンの党壩郷や汶川县にもある。山の神を畑にまねき、畑の神そのものの表象とされていく過程がみられる。

以上のことからギャロン人の「クルジ」やナムイ人の「アルプ」、チャン人の「ラシ」は、と

〔表2〕ギャロン・チベット族の各地域別の山の神まつり

地域 内容	卓克基	松 崗	党 壩	大 金	小 金	理 県	汶 川	*4
時 期	3月～4月初	3月初 (3～4日間)	2月13日	1) 2月初 2) 4月～5月 3) 収穫後	3月中 *高山部は6 月18日か7月 13日	2月15日 3月13日	2月11日	5月 (3～4日間, あるいは10日間 位)
*2 神	(山神菩薩)		「日角爾都」					
*3 祭 場	壩子  屋上の「クル ジ」	神林の「叉叉」	山頂の嘛呢堆「叉叉」		山頂の堆	山王廟	山頂	野外にテントを はる  神山の祭壇
供 物	柏香枝 きれいな小麦	ツァンパ 酥油茶 チンクー酒 チンクー麦と 小麦	馬や鶏の毛を さした木の枝 小麦粉製の家 畜や神の乗り 物	チンクー酒 チンクー麦や ソバ	半升のチン クー麦や小麦 クルミ ヤギとニフト リ		サンショウ枝 チンクー麦製 の日・月・量 だんご・あや 蜂蜜 ヤギ2匹	*5 ツァンパ 小麦・酥油 経幡・神符 木の札
内      容	「揪烟烟」   ラマが経をよ む みなで酒を飲 み、「鍋庄」を おどる		早朝、家ごと に供物を持っ て山頂へ。嘛 呢堆に小枝を さし、柏香枝 をもやす(揪 烟烟)  嘛呢堆にさし た木の枝を各 戸がもち帰 り、畑にさす	「揪烟烟」	ラマが山上の 境界に旗を立 てる   ヤギやニフト リを山上で放 つ	供物は火にな げ入れもやす   サンショウ枝 を各戸がもち 帰り、畑にさ す		土司や廟が主催 サマが廟内で経 をよんだ後、ラ マと人々は隊列 をくんで神山へ 行く。  山上でラマが消 災儀式を行う。 ラマが鰲頭や旗 を災源の方向に むけて経をよ む。爐に供物を 投入し、紙符を まき、神名をよ ぶ、人々は銃を うち、叫ぶ。 宴会・鍋庄おど り賽馬

- 〔註〕
- \*1 地域の名称及び区域の範囲は「嘉絨藏族調査材料」によった。
  - \*2 神については「山神」、「山神菩薩」、などの語で表す。
  - \*3 上段は村単位で行う場合、下段は戸別の場合。
  - \*4 土司や寺院によって催される山神まつり。「若木紐」・「牛山祭山」・「看花節」・「要坝子野養」などと  
ばれる。
  - \*5 →は同様の儀礼が行われることを示す

〔出所〕『嘉絨藏族調査材料』、『文化芸術誌』、1990年と1992年の現地調査などにより作成。

もに白石と木の枝を有する同型の石塔であり、山の神まつりにおいて重要な意味をもつものであることがわかる。では「クルジ」を構成する白石や木の枝には、どのような意味があったのだろうか。白石についてはギャロン地区ではほとんどその意味が失われており、納足村の住民はそれを飾りだと説明する。ただし緯斯甲地区には、次のような伝承があった。かつて人々が外部の敵と戦った時に、夢の中で白石を武器にせよとの神の啓示を受けて勝利した、と<sup>33)</sup>。これは、チャン族の史詩「羌戈大戦」<sup>34)</sup>の内容とほとんど同じであり、興味深い。このようにギャロンの白石や木の枝については、チャン族ほど明瞭ではないにせよ、ほぼ同様の意味があったと推定できる。すなわちともに山の神の憑依体であり、神を表象するものと意識されていたと考えられる。

また「烟祭」と「クルジ」型の石塔という組み合わせについては、チベット仏教を全て受容していないチャン族で「ラシ」がみられることや、「烟祭」そのものがそもそもチベット仏教がおこる以前からの儀礼であることなどから、チベット族地区からチャン族地区にいたる広い地域に古くから存在していたものと思われる。

それでは「クルジ」に憑依し、表象される神を、ギャロン人はどのように描いていたのだろうか。それは、神山の中から選び出されて特定化された白石や樹木によって初めて可視化される存在である。人格化に至っておらず、山全体に存在する精霊のようなものと意識されていたようである。故にギャロン人は、山全体をむやみに侵してはならない存在と考え、特に鉦山などの開発を極度に嫌った<sup>35)</sup>。また山の神まつりの時には、まず「揪煙煙」の煙によって「クルジ」の周辺を浄化して聖城を作り、神を招いた。そしてツアンパや酥油茶、チンクー酒などを供えて神を慰勞し、秋の収穫後の「開山」まで山中では木を伐採したり、炭を焼いたり、狩りをしたりしないことを約束して「封山」を誓ったのである<sup>36)</sup>。

また彼らの神は、天界と山界、さらには家屋や畑、集落などの人間界の各所を去来する神でもある。彼らにとって山は、神（精霊のようなもの）の所在する世界と人間界の境界であった。神は、山そのものの支配者であるばかりでなく、家屋の屋上や集落の入口の「クルジ」に宿って家神となり、村の守り神となって、外部からの邪悪な物の侵入を防ぐ力をもつと信じられてきた。また山頂の「クルジ」にあった木の枝を畑に運び込んで挿すことで、神は畑の神ともみなされていたのである。

## 5. 理県上孟郷塔斯村の「鍋庄舞」

### (1) ギャロン・チベット族の鍋庄舞

阿壩州（アパ）州のチベット族の鍋庄舞は、農業区に住むギャロン・チベット族の「達爾嘎」と牧畜区のチベット族の「俄卓」の2種に大別され、「達爾嘎」という言葉はギャロン・チベット語で跳舞の意味であるという<sup>37)</sup>。鍋庄舞という名称は居間の炉のまわりを囲んで踊る、円形になる踊りの形態から生じた名称のようである<sup>38)</sup>。

理県の上孟郷は、ギャロン・チベット族地区の東端にあって、チャン族地区や漢族地区と隣接し、その影響を古くから受けてきた。しかしながら住民のほとんどがギャロン人であり、他民族

の文化と接触することによってその伝統的な文化は対照され、一層鮮明に保持されてきた。塔斯村は、郷内の5つの村のなかでも最も規模が大きく、古い集落である。

上孟郷には5ヶ村全部に鍋庄舞があり、年間の祭日、結婚式などの「ハレ」の日に、または新築、収穫後、あるいは遠来の客を迎えたり、その他何かめでたいことがあった場合などに、祝福と娯楽を兼ねて定期、不定期に賑やかに踊られる。廟界や郷政府関係の村人の会議などでは、大きな焚き火を囲んで外で鍋庄舞を踊ることもある。結婚式は上孟郷全体で年間数十回あり、鍋庄舞がもっとも頻繁に踊られる機会である。後述のように、祝宴は男女双方の家で3日間ずつ行い、この間に鍋庄舞が踊られるのである。ただし、親戚に結婚式など祝いごとがある時以外には、郷内の他村に出かけて行って鍋庄舞を踊ることはほとんどないという。つまり、鍋庄舞を通しての村相互の交流はなく、基本的に鍋庄舞は村内ごとの踊りなのである。

ギャロン・チベット族の鍋庄舞の形態は男女が輪になり、歌を男女交互に歌いながら、踊りの所作とともに輪が行きつ戻りつし、時には互いに手をつないで足の所作だけで踊る動作も入る。この形式の踊りは中国の少数民族に広範に伝承しており、現在わかっているところだけでもチベットから雲南、四川、貴州、さらには黒竜江、台湾にまで分布している<sup>39)</sup>。全少数民族の3分の1がこの形式の踊りを持っていて、雲南省では24の少数民族のうち16ほどの民族集団にこの踊りがみられ、とくに西南中国地域に分布が濃密であるという<sup>40)</sup>。

ただし当然ながらほとんどの歌は自らの言語で歌われ、歌の種類も内容もそれぞれに異なる。またこの踊りは基本的には同じ形態をとっても、踊りの所作や形式もそれぞれに異なる。四川省ではギャロン・チベット族の鍋庄舞以外に白馬チベット族の「圓圓舞」、チャン族の「沙朗」(シャラン)を我々両名はこれまでに調査しているが<sup>41)</sup>、歌、踊りの所作、さらには輪の組み方、転回の方角などにそれぞれ顕著な特色がみられる。また、同一の少数民族であっても居住地域が隔たっていれば異同が生じるようである。そういう意味で、この踊りはそれぞれが民族の生活・文化や地域性を反映した独自の特色を持っているといえる。

なお、チャン族の「沙朗」の歌と踊りは、めでたく楽しい時と哀しい時に踊る2種があって、後者は葬式の時に家や埋葬場所の棺の前で踊るのであるが、ギャロン・チベット族の鍋庄舞は葬式には行わない。以下では鍋庄舞の事例として、塔斯村での結婚式に踊られたものを検討してみよう。

## (2) 結婚式と鍋庄舞

1992年1月12日、塔斯村の楊建国(20歳)と雍万琼(24歳)の結婚式の前夜、花嫁になる女性の家で行われ鍋庄舞は<sup>42)</sup>、ことに迫力に満ちていた。居間の壁に沿って並んだ男女が、それからそれへと途切れることなく歌を歌い、歌に合わせて手を振り、足を踏んで次々に踊りが進行していった。それほど広くない居間に多数の踊り手が入っているので、鍋庄舞は輪にならず壁に沿ってコの字型に広がり、隣の人との間隔も接触しそうなほど詰まっている。炉の周囲には子供から大人まで村人たちが集まっていた。明日花嫁となる人は階上の自室に友人と籠をもったままで

あったが、一度だけひっそりと姿を見せた。

踊りが賑やかに続いていくうちに夜も更けて、炉のそばに置かれたチンクー酒の瓶の口が開けられた。ここで踊りはひとまず休止となる。長老が葦で作った長いストロー2本を箸がわりに持ち、祝福の言葉を歌うような調子で述べはじめる。踊り手も、集まってきた村人たちも静かに長老の言葉に耳を傾けている。長老は祝福の言葉を述べながら、時おり箸で瓶のチンクー麦をつまみ、祭壇に向けてふりまきながら、何度も「ラスキー」という言葉を発した。この「ラスキー」という言葉は結婚、出産、新築などめでたい時に使う言葉で「贈りものは少ないけれど一杯の酒が湖となるように、家が繁栄することを祈ります」という気持ちが込められた祝福の言辞だということである。

この儀礼の後、すぐまた踊りが再開した。チンクー酒の瓶には数本のストローが入れられ、踊り手は飲みたい時にいつでも列を離れて喉をうるおすことができるようになっている。儀礼の後はその場の雰囲気も踊りの様子もくだけて祝宴らしさを増してきた。この儀礼をはさんで祝宴は儀礼的な前半部と享楽的な後半部に分かれるように思われた。なお、家で鍋庄舞を行う時には、深夜12時まではその家の家長に敬意を表して、祝宴に合った踊りを整然と踊るが、それ以後は踊り手が好きな踊りを自由に踊ってよいということであるから、饗宴的な雰囲気がますます濃くなってくる。

翌日、結婚式の日。午前中、新郎新婦の家族が互いに祝福の言葉を交わし合い、少年僧をともなったラマ僧が「長寿経」「喜経」を読経して祝禱する。午後に入ってすぐ長老が祭壇に祈りを捧げた後、新郎の家で選んだ10歳ほどの少年に「饅饅」<sup>43)</sup>（ギャロン・チベット語で「ゲネ」）を背負わせる。この饅饅は大菩薩をあらわすとこの村では認識されており、昔は小麦粉で作った。これは結婚式のみならず、出産の時の祝いとしても持参する。

祭壇の前に縦に長く赤い敷物が敷かれ、二階から友人に付き添われて下りてきた花嫁が泣きながら祭壇に向かって座り、その肩にカタが何枚も掛けられる。家族、親族が金などを贈って新婦の幸福を祈る。新婦は家族と生活が離れるのを号泣して惜しんだ後、親族、友人とともに一列になって花婿の家に向かう。泣きながら歩く花嫁には数名の友人が寄り添って行く。花婿の家まで距離はおよそ150メートル。その間、隣人や親戚が戸外に酒や食べ物のをせた卓を出して新婦を祝福し、花婿の家の前では爆竹が鳴らされる。

新郎の家では少年僧をともなったラマ僧がすでに、祭壇の前方に出した机の前に座り経を唱えている。祭壇では2本の太いローソクが燃えて、その中を明るく照らしている。「饅饅」はトウモロコシを入れ、豚肉の脂身をのせた容器の上に据えて祭壇の前に供えられている。新婦側の長老、新郎側の長老を上座に列席者が2列に向かい合って座り、新婦側の長老が吉祥をあらわす言葉を述べ、新郎側の長老が花嫁を送ってくれた人に感謝の挨拶をする。ふたたびラマ僧が読経する。新郎・新婦は米の敷かれた皿の上にのせた焼酎の器から、スプーンでその焼酎を掌にのせてもらいそれをなめる。そこでいったん式が中断し、料理が仕度がされ夕刻より祝宴がはじまる。以上の式は親戚と花嫁側の後見役の友人20人ほどが参列して行われ、1時間もかからずに終了した。

夜9時30分近くになって、式が再開した。今度は新郎新婦が祭壇の前に立ち（祭壇に向かって新郎が左、新婦が右に立つ）、まず天を拝し、ついで先祖、父母を拝す。新郎は年長者、親戚、村の代表、若者代表たちから贈られた長い赤布を、たすき掛けに何本も結わえてもらう。新郎は祭壇に何度か拝礼を繰り返し、つぎに参列者から「10元だけどこれを100元、1000元に増やして下さい」「来年は双子の子供を産んで下さい」「男の子の誕生を祈っています」などという祝辞とともにお金を贈られる。この時も新郎は時おり祭壇に拝礼する。そして、祭壇前の机に置かれたアメ、タバコなどが皆に配られて終了、この間40分ほどであった。

以上のように結婚式は中入りを挟み、前後2回に分けて行われる。昼間の式は親族と新婦側の友人の列席のもと、ラマ僧の祝福の祈禱と新郎新婦側長老の祝辞を受けて、盃を交わす儀であり、これは花嫁を新郎の家に迎える儀式であると思われる。夜の式は新郎の友人も加わり、物や金を贈って祝辞を述べ2人の前途を祝福する儀で、花嫁を迎える儀に比べると日本の結婚披露宴のようなくだけた雰囲気がある。そして、この後22時過ぎから引き続き鍋庄舞がはじまる。

新婦の家での鍋庄舞と同じく、祭壇の前を中心として向かって右に男性、左に女性が壁に沿って並び、歌を合唱しながら手を振り、足を踏み、回転して賑やかに踊る。髪に花をつけた少女が焼酎の瓶を持って踊っている人の間のまわり、飲むようにすすめて歩く。飲みたい人はそれをラッパ飲みで飲んで踊りを続ける。夜が更けるの忘れて新郎の家の居間には鍋庄舞の歌声と踊りの足音が途切れなく響き続けた。

### (3) 鍋庄舞の歌と踊り

ギャロン・チベット族の鍋庄舞の歌は、上孟郷塔斯村には数百曲、踊りの種類は20種ほどあるという。歌の種類は多すぎて、すぐには数えられないということが正直なところかと思う。まれに皆で酒を飲んで楽しい時に歌うこともあるが、これらの歌はほとんど鍋庄舞の時に歌う。つまり鍋庄舞の行われる日は、ギャロン・チベット族に伝承する歌が、村人たちに歌われる機会でもある。

歌の種類には(1)祝い歌、(2)新年の歌、(3)春を迎える歌、(4)吉祥を讃える歌、(5)結婚式を祝う歌、(6)村を讃える歌、(7)山や川を讃える歌、(8)農作物を讃える歌、(9)豊作を喜ぶ歌、(10)労働歌、(11)菩薩と山神を讃える歌、(12)ラマ僧を尊敬する歌、(13)村を離れる人を贈る歌、(14)遠来の客をもてなす歌、(15)情歌、(16)役人が人民を讃える歌、(17)年長者を尊敬する歌、(18)両親を尊敬する歌、(19)若者を讃える歌、(20)政府や政府のリーダーを讃える歌などがある。

これらの歌の中には(19)のように解放後あらたに加わって、今では鍋庄舞の時に歌う歌となったものもある。解放後に政府や父母を讃える歌が増えたという。古くから伝わる皇帝を讃える歌が、中央政府を讃える歌に内容が変わった(20)のような例もある。また、解放前の婦人の苦しい生活と仕事を歌った歌もある。しかし、鍋庄舞の歌は古来同じ歌詞で歌い継がれている歌が多いようである。

鍋庄舞では数多くの歌が歌われるが、「リャンバルゾ」「ガーマルゾ」「ブシラメ」という3曲は、



この順序で必ず最初に歌うことになっている歌である。なお、いうまでもなく歌の名称は踊りの種類を規定しており、たとえば「リャンバルゾ」ではその歌で決まった踊りが踊られるのである。まずつぎに歌の大意を記すことにする。

①「リャンバルゾ」

(1段) 今年は豊作でした。今日はもっとも良い日です。

(2段) 今夜は結婚式(その他祝い事)を祝して、皆で鍋庄舞を踊って楽しい時間を過ごしましょう。

②「ガーマルゾ」

(1段) 今日はもっとも良い日です。私たちは楽しく鍋庄舞を踊ります。

(2段) ラマや年長者がいったことが、本当になりました。めでたいことも本当になりました(ラマ僧が選んだ結婚式などの日取りによって、めでたいことが実現したことを喜ぶ歌)。

③「ブシラメ」

(1段) 今日はもっとも良い日です。私たちは楽しく鍋庄舞を踊ります。

(2段) ラマが読んだ経が本当になりました。この家の万事順調と子孫繁栄を祈ります。

この3曲は当事者であるその家の主人に対して、結婚式などの祝い事の成就と家の繁栄を祝す歌で、上述の(1)祝い歌としたのがこの3曲である。このような内容の歌が鍋庄舞の最初に歌われるということは、鍋庄舞が結婚、新築などの祝い事にとくに欠かせない踊りであることを示しているように思われる。したがって、この3曲は鍋庄舞の最初に置かれて重視されているのだと推察できる。

最初に以上3曲の踊りを踊れば、あとはどの歌を選んで踊ろうが自由である。ただし鍋庄舞では数多くの歌を歌うが、たとえ夜通し踊っても同じ歌を繰り返すことはないという。すべて異なる歌を途切れなく歌い、踊るのである。

以上3曲にみられるように、鍋庄舞の歌ほとんどの歌が2段で構成されているが、3段の歌も多く1段の歌もある。次に異なった種類の歌の大意を4曲あげることにする。

a. 「チェライゲンベ」(菩薩と山神を讃える歌)

(1段) 寺の菩薩は私たちが長寿であるように、病氣しないように、痛いところがないように守ってくれています。

(2段) 山王廟の菩薩は私たちが万事順調にいくように、兵となって出ている人が無事でいるように、敵に勝つように、無事に帰るように守ってくれています。

b. 「レキュコボヤビニ」(遠来の客をもてなす歌)

(1段) お客さまは遠くからはるばる来てくださったので、私たちは銀の壺に入ったお酒で歓迎いたします。

(2段) お客さまは遠くからはるばる来てくださったので、私たちは金の壺に入ったお酒で見送ります。

c. 「ナンケイチャルチューマバメエー」(農作物を讃える歌)

(1段) 天は雨を降させます。雨が降ると地上に何でも育つ。

(2段) 形状も良く、この地方はとても良い。農作物の種類は多く、収穫も多い。

d. 「チェントウボーツア」(きれいな鳥の意味の情歌)

(1段) 川のそばの鳥はとてもきれい。鳥の尾が揺れている。頭の上に黄色い毛がある。

(2段) 男の若者はおしゃれです。狐の毛皮の帽子をかぶっている。腰に絹の帯をつけている。  
刀も腰にさしている。

(3段) 女の若者はとてもきれいです。頭に珊瑚の飾りをつけている。

鍋庄舞の歌は1段目の男女どちらが先に歌いだしてもよい。それにつづいて男女どちらかが同じ歌詞を繰り返す。そしてはじめのこの部分はまだ踊らずに立ったまま歌い、つぎの2段目の歌から踊りに入る。歌は男女が交互に同じ歌詞を繰り返していき、時おりその場に合せて部分的に少し違えた歌詞を歌うこともある。踊りは男女が同時に踊るのであるが、歌のほうは男女が合唱することはないのである。1曲がおよそ5、6分で終わる。

前述したように、鍋庄舞のはじめに歌い踊る3曲はきまっているが、一番最初の「リャンバルゾ」が鍋庄舞の基本となる型を持った踊りだということである。この踊りの特徴として①片腕を左右に振りながら、片足の爪先を上げて左右に動かす所作、②少し腰を落として片足の爪先をトンと突くのきっかけに体の向きを正面、左、右と変える所作、③片腕を振りながら片足を強く踏む所作、④腰を落として両手を腰の高さで前に出してこねるように返す所作、⑤左手を斜め上に上げ、左足をくの字に曲げて右足の膝の部分に上げる所作、⑥体を一回転する所作、⑦跳びながら片足ずつ交差させて踏み変える所作、などがみられる。

ギャロン・チベット族の鍋庄舞には、白馬チベット族の「圓圓舞」やチャン族の「沙朗」のように手をつなぐ踊りは少ない。したがって、鍋庄舞には「リャンバルゾ」にみられるような片手を振る所作や回転したり、足を踏む所作がほとんどの踊りに入ってる。踊りの輪も祭壇前を中心にして多少行きつ戻りつするだけである。手をつなぎ輪が左に回っていき、ついで右に戻る形態が顕著にみられるのは、たとえば「ヤルサンポーランツェンブイ」(昔は皇帝を讃える歌、今は北京の中央政府を讃える歌)のような特定の踊りだけである。ただし、どの踊りも最後は全部、一度手をつなぎ、つぎに手を離して腰の高さで腕を曲げ両掌を上に向け、拝して終わる。ギャロン・チベット族の鍋庄舞は手を柔らかく使う所作と足を強く踏む所作が合わさって、落ち着いた雰囲気の中に素朴な力強さがみられる味わい深い踊りである。



写真1 結婚式前夜の鍋庄舞  
(嫁に行く女性の家)



写真2 ゲネ(饅頭)を背負った  
少年と花嫁一行



写真3 結婚式で経を読むラマ僧



写真4 結婚式の夜の鍋庄舞  
(新郎の家)

## 6. ガンガン寺の仮面舞踊

上孟郷のギャロン・チベット族は、紅教派（ニンマ派）のチベット仏教（ラマ教）を信仰している<sup>44</sup>）。ニンマ派はパトマサンバヴァの説を信奉する古派最大の宗派である。郷全体の寺院として塔斯村より約1キロ離れた山の中腹にガンガン寺という寺院を置き、現在大ラマ以下10数人のラマ僧（ほかに修行僧が35人ほど）がいる。ガンガン寺は本尊として蓮華菩薩（ギャロン・チベット語で「ウルチャールムチ」）を祀っており、1月15日と4月8日から10日の間法会を行う。1月15日はチベット仏教を信奉している年長者を主体とする法会であるが、後者は上孟郷の全戸の老若男女が正装して寺に参集し、法会の行事や仮面舞踊（跳神）を見たり、持参のごちそうを食べたりして1年中でいちばん賑わう行事である。

上孟郷でも中華人民共和国成立前はほとんどの家が熱心なチベット仏教徒で、男の子が何人かいる場合は1人だけ残してあとはラマ僧になったというが、現在は若い人のチベット仏教に対する信仰心は薄くなっており、両親がそれに厚く帰依している家の子供だけがラマ僧になる状況にある。それも幼い時から寺院に属すのではなく、ほとんどが中学校を卒業してから仏門に入る。ラマ僧も中華人民共和国成立前のように寺で共同生活をするのではなく、現在は自宅に住んで寺に通って修業をしている。

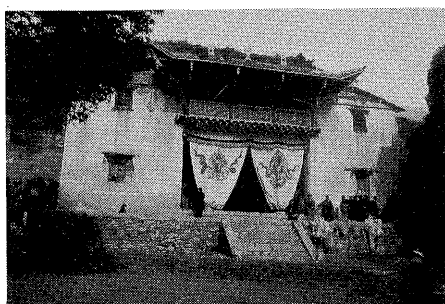


写真5 ガンガン寺正面

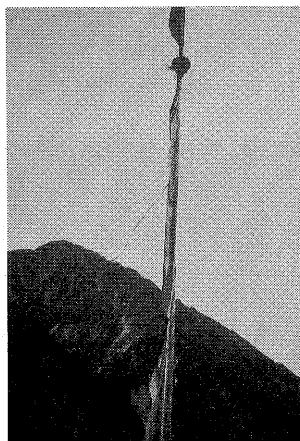


写真6 村の中のチャダ

しかし、やはり村の信仰の中心はチベット仏教である。一步村へ入るとすぐ目につくのが「チャダ」という幟で、これは外から来る悪魔を払い、また外に出かける人の安全も守ってくれるという。また新築時に屋根の上に立てる小さな旗を「カチャン」といい、「チャダ」と同じ役割をしているというが、これが壊れたらラマ僧が経を読んで、散米してから替える。どちらもチベット文化圏の「タルシン」や「タルチョ」と同じく、主として外部からやって来る災疫などの悪魔を遮るために置かれているようである。また、ラマ僧は病氣治癒の祈禱の経も読み、長寿経も読んで村人から尊敬されている。ラマ僧を尊敬する歌は鍋庄舞でも歌われており、つぎのような内容である。

「イチョーツェイラマ」

(1段) 私たちの村にラマがいて、私たちのために経を読む。

(2段) ラマは経を読んで、長寿と順調な生活を、外へ出かけた人が無事に帰ることを祈って守ります。

ラマ僧は結婚式、葬式などの儀礼、啞巴会（4月10日の法会の後に行う断食の1種）ほかの重要な年中行事に関わるほか、村人の健康、長寿の祈禱をはじめ、村のさまざまな生活の断面に関わっているのである。

さて、4月10日の法会にはチベット自治区やラダック、ブータン、ネパールなどのチベット仏教寺院で行っていると同様の仮面舞踊が演じられる。ただしかつて24種あった仮面とさまざまな衣装は文化大革命の時に失い、近年衣装だけはあらたに作った。演目は全部で13番伝わるというが、見ることができたのはそのうち「ツェスジャ」「デワ」「セユェ」の3番である<sup>45)</sup>。

当日ガンガン寺の境内は正装した老若男女であふれ、物売りも出て華々しく賑やかな雰囲気になっていった。若いラマ僧が寺の正面の石垣の上に並び、「ドンマル（ロングホルン状の管楽器）」、「デリ（チャルメラの1種）」、「ボツツェル（鑼鼓）」を鳴らすと、まもなく獅子舞と竜舞が境内で勢いよくはじまった。これが終わると本堂内部の蓮華菩薩の像の前にラマ僧が2列に並び、像を拝してから一列になって正面階段を降り境内にあらわれる。一行は大きな天蓋の下に入った大ラマを中心に、楽器を奏しながら境内の周囲を右回りに行道して、境内をはさんだ建物に入る。



写真7 「ツェスジャ」

この建物はラマ僧の着座場所であり、楽器を鳴らす楽屋でもあり、向かって中央に大ラマ、一段低く右に鑼鼓を鳴らすラマ僧、左側の床にその他の楽器を奏する若いラマ僧たちや村人が座る<sup>46)</sup>。

ラマ僧たちが所定の場所に着座すると、帽子を被った「ツェスジャ」の踊り手が一人一人本堂からあらわれて、順次踊りに加わっていく。最終的に9人が揃い（本来は10人だという）、境内一杯に広がって長い両袖を翻して、片足を



写真8 「デワウ」



写真9 「セユエ」

でも一連の演目の最初に位置しているのは、ブータンでの解釈のようにこの踊りに地鎮めの性格があるからではなかろうかと思われる。

「デワ」はたすきがけに腰に布をいっぱい垂らした若者4人が、境内中央で2人一組になって片足で跳ねて回転したり、激しく跳躍したり、シンメトリカルに踊る所作に特徴がある軽快な踊りである。当地では「全ての規則に違反しない」という意味をあらわした踊りであると解釈されているが、これは冥界の主である「ドゥルダ」の踊りである。ラダックでは「チティパティ」ともいう<sup>50)</sup>。この世に災いをもたらす悪魔を破壊し、冥界へ追送する前段として踊られ、本来は



写真10 経を読んで祈禱する大ラマ

上げ順（右）に逆（左）に体を回転させながら踊る。この踊りには「地上に育つもの全てを菩薩に献上する」という意味があるとされているが、ラダックで「ガクパ」または「ジャナク」<sup>47)</sup>、ブータンでは「シャナ」と呼ばれ、黒い帽子を被る踊りであるところから、一般的に「Blak Hat」（黒帽の踊り）といわれている演目と踊りの形式が基本的に同一である。

ブータンでは、この踊りは一説に「地に対する儀礼を行い、マンダラを形成して悪魔をこなごなにする」<sup>48)</sup>と解釈されており、ラダックでは実際に「ダオ」と呼ぶこの世の罪業を担った悪魔をあらわす人形を破壊する役割も担っている<sup>49)</sup>。順・逆にくるくると顕著な回転動作を見せて舞うように踊る所作には、シャーマニズムの要素が強く感じられる。このような回転動作によって災いを払う法力を発動するのであろうと思われる。この踊りがラダック、ブータン、そしてギャロン・チベット族の法会におい

て骸骨の仮面、骸骨の衣装をつけて登場する。

「セユエ」は細い棒の先端に布きれをいっぱい結びつけて垂らした「ダタル(ゲブチュルシャメともいう)」を右手に持った2人が、それを振りながら境内を跳ね回り、ところどころで激しく回転して踊る。そのうち、境内中央に米とトウモロコシを入れた三宝に似た台を置き、2人の踊り手はその前に並んで座し、刀をとってそれを水平にかざす。これは「世界の安定を破

ることができない」ことをあらわした踊りだというのが、前段の「ドゥルダ」の踊りと関連した、悪魔を破壊し追送する踊りであることは疑いない。

米とトウモロコシは悪魔の肉をあらわすといい、この踊りの最中にはラマ僧の読経の声がいちだんと高くなり、境内中央の石の台の上で線香が焚かれる。また本堂正面に大タンカが吊るされる。ラダックでは「シャワ」がツァンパで作った悪魔の象徴「ダオ」を破壊することがあるが、この「シャワ」は鹿の姿をしている<sup>51)</sup>。「セユェ」という言葉は梅花鹿の意味であるといい、座って悪魔を破壊する姿もラダックの「シャワ」と共通している。

仮面舞踊が終わっても参集した村人はすぐには帰らず、蓮華菩薩をお参りにいく人、グループで談笑する人さまざまであったが、数人の年長者は合掌あるいは「マリヤンコル」(マニコルのこと)を回し、大ラマの前に座った。大ラマは右手に持った「ダタル」を振り、左手の鈴を鳴らして読経した後、「ダタル」をラマ僧に渡し、年長者たちはその「ダタル」で両肩を撫でてもらっていた。これは大ラマの読経により「ダタル」に込められた呪力で病気、悪災などを払う祈禱であろう。

「デワ」「セユェ」とも本来は仮面を使用する踊りであるのに、若いラマ僧のいがぐり頭のままの踊りであったので、いささか間が抜けた感じであった。しかし、若者たちが踊る踊りはエネルギーに満ちており、踊りの質もかなり高かった。仮面をつけたなら、さらに迫力が増して素晴らしい踊りとなるであろう。

ところで、ガンガン寺の境内に入って驚いたことは、鍋庄舞の時にはそれほど顕著に見えなかったチベット仏教が、村人の中に突出して見えたことである。絶え間なく「マリヤンコル」を回す人、大ラマが境内にあらわれると一列になって合掌し祈りの文句をささげる婦人たち、正装して嬉しそうな娘たちの姿。ラダックやブータンなどのチベット文化圏と同種の熱心で厚い信仰をここでも目の当たりにした。皆の態度や表情とチベット仏教が一体となっているように見え、あらためてこの人たちがチベット仏教徒であることを再認識したことであった。

## 7. 結語

ギャロン・チベット族は、1950年代の民族識別以来国家からチベット族と称されてはいるが、歴史的には「チベット化」された先住の民族集団とみなすべきであろうと思われる。固有の言語であるギャロン語は、チベット語の方言の枠を大きく越え、他のチベット諸語、とくにチャン語群と重なる要素が指摘されている。また「民族走廊区」といわれる四川省西南部の複数のチベット族やチャン族との共通した地域文化圏も想定されている。

本稿でとりあげた「揪煙煙」の儀礼と「クルジ」は、このような共通の地域文化を代表するものの一つである。それは、諸集団に共通した生活空間である山をめぐる行われてきた。山に暮らす人々は、山の力を畏怖し、そこに可視化することのできない人力を越えた存在を想定して、神とみなした。そしてその存在を招き、祀るために山頂に「クルジ」型の石塔を築き、柏香樹を燃やして煙を上らせる儀礼をとり行った。「揪煙煙」は、チベット仏教が信仰される以前から行

われていた古来の儀礼の形であり、それはチベット仏教を受容しなかったチャン族において、神を招いたり送ったりする際に必ず行われていたことから推測される。

このような「クルジ」は、山の神まつりの祭場として「揪煙煙」の儀礼とは不可分のものであった。「民族走廟区」の各民族集団は、極めて類似した石塔をそれぞれの地域の山頂に築き、「クルジ」の白石や木の枝によって神の存在を表象したのである。

一方、山の神と「クルジ」は、生業や日常生活にも深く関わってきた。ギャロン地区の経済は、運送業や郷内での木材加工などの農業以外の部門の著しい発展と大幅な収入増などによって大きな変化が起きている。しかしそのような変化にもかかわらず生業の中心である農業部門においては、自給自足という伝統的な観念がきわめて根強く残っている。そしてこのような伝統意識の根強さは、生業や生活に深く関わってきた年中行事にも反映されている。チベット仏教の寺院による廟会や「跳界」などは、中華人民共和国下の宗教政策のために衰退をよぎなくされたものの、7月に野外で遊ぶ「看花節」や、正月や3月の「揪煙煙」は、従来の宗教性よりもむしろ娯楽性を強めながら、なお年中行事として盛んに行われている。

ギャロン・チベット族の鍋庄舞には、本文で述べたように歌にも踊りの所作にも、この民族独自のものといっていよい特色がみられる。主として村の年中行事やハレの日に祝福・感謝・喜び・尊敬・いたわりなどの気持ちを込めた歌を歌い、老若男女がともに楽しむ芸能である。鍋庄舞の歌も踊りも、それが巧みな年長者から年少者へと自然に伝承されていく。夜が更けるのも忘れ、長時間ほとんど途切れなく歌いかつ踊ることで村人の共同意識が高まり、日常的な労働を継続する意欲も新たになる。鍋庄舞は村人の生活と密接に結びついた、大変重要な踊りだといえる。

これに対しチベット仏教の仮面舞踊は、ラマ僧によって演じられる宗教儀式の一つである。ラマ僧も上孟郷の村人ではあるが、これは寺に付属する芸能であり、鍋庄舞とは伝承の基盤が異なる。ラマ僧以外の村人は仮面舞踊には加わることができないという点においても、村レベルを越えた存在である。しかしチベット仏教はギャロン・チベット族の精神の支柱であり、チベット仏教と一緒に入ってきたチベット文化はいろいろな側面で彼らの生活を規定している。ガンガン寺は、日常性を越えたところで上孟郷5ヶ村の村人を結ぶセンターの役割も果たしている。これらの仮面舞踊を見て、村人たちは諸仏諸尊の世界を知覚し、大きな法悦を感じているのに違いないのである。

### 【付記】

本稿は、1990年8月と1992年2月の2度にわたって行ったギャロン・チベット族地区の実地調査に基づくものである。第1～4章及び参考文献を松岡正子が、第5・6章を高山茂が、そして結語は両者が分担して執筆した。

### 註

- 1) ギャロン地区、即ち大渡河上流の大金川と小金川の2河川の合流する地域に住む民族集団の

総称である。「ギャロン」という呼称は、チベット語の音に基づく他称である。漢族の文献には「嘉絨、甲龍」などと記され、小金や汶川など現地の漢族は、かつて彼らを「土民、夷人、夷族」と呼んだ。また阿壩州の草原地区のチベット族や甘孜州（旧西康省）のチベット族は、彼らを「嘉絨娃」と呼んで自分たちと区別した。チャン族は「芝布」と呼んだ。ギャロン・チベット族がチベット族に正式に分類されたのは1950年代の民族識別以降である。

「嘉絨」の語の意味については、①漢族地区に近い河谷地域（馬長寿説）、②小金県と丹巴県の間にある彼らの最高の神山「木爾多」の神「斯巴嘉爾木」に由来し、その山を中心とした大小金川流域（毛爾蓋・桑木旦説）を指すなどの諸説がある。後者はギャロン人の学者が語音と伝説によって出した説であり、前者より説得性がある。自称は「ガレ、ガロン」で、地域によってやや異なる。「四土」地区では「ロンパブ」、理県では「ギャガブ」、汶川県では「ドリブ」という。ギャロン人の祖先は、5世紀以前に旧西康省一帯に居住していた諸羌の一つである「附国」の「嘉絨夷」だとみれる（『隋書』巻60）。なおギャロン人の人口についても諸説がある。『嘉絨藏族調査材料』（1954）ではギャロン地区の人口を5～6万人とし、さらに周辺の丹巴県の巴底や下壟巴宅屯、宝興県、金湯県の一部地域でギャロン語を使用している住民も加えて、およそ6、7万人ともいう。長野（1984）は、自身の実地調査に基づいて約9万人とし、李紹明（1987）は17万人、載金鵬ら（1957）は約10万人とみる。人口調査ではギャロン人はチベット族に含まれており、正式な数字は不明である。ただし現地の人にその人口数を聞くと、おおむね10万人という答えが常であるため、本文ではこの数字をとった。人口分布（1954年の統計、括弧内の数字は各地区の全人口に占める割合）は、「四土」地区が26000～30000人（80パーセント）、大金県が13779人（19.6パーセント）、小金県が9527人（29パーセント）、理県が7636人（37.6パーセント）、汶川県が3000人（12パーセント）、蘆花県（現在の黒水県）が800人である。

- 2) チベット人は、自らの土地をつぎの5つによびわけていた（村松、1978）。アムド（青海：北東部遊牧地帯）、カム（西康：東部遊牧地帯）、ユイ（衛：中央部ラサ地方）、ツアン（蔵：南部穀倉地帯）、アリ（阿里：西部遊牧地帯）。現在の西藏自治区（1965年9月成立）は、このうちのユイとツアン、アリ、カムの西部を合わせた地域で、総面積123万平方メートル、総人口195万人（1985）で、人口の95パーセントをチベット族が占める。四川省には、チベット人全体の約24パーセントにあたる92万人が暮らしており、甘孜州（チベット族は全人口の7割）、阿壩州（全人口の4割）、涼山州木里藏族自治县（全人口の3割）に分布する。このうちカムのさらに東端に位置する阿壩州のチベット人は、アムド方言を話し、遊牧を主な生業とする「草地藏族」と、ギャロン語を話し、定住して農業に従事する「嘉絨藏族」とに大別されている（『四川少数民族』1982）。
- 3) 長野 [1984, p487] の註に詳しい。
- 4) 長野 [1984, pp484～487] による。
- 5) 『四川少数民族』（1982）の巻末の「四川少数民族言語分類」による。



- 6) 孫宏開 [1983, pp150~155] 参照。
- 7) 1982年, 費孝通らは, 「六江流域」が, 歴史上, 6つの大河に沿って様々な民族集団が移動と興亡を繰り返した「民族走廊区 (民族の廊下)」であることを指摘し, 「六江流域民族総合考察」を提起した。この指示の下に中国西南民族研究学会は, 1982年5月~7月と1984年7月~9月の2回にわたって現地調査を行い, 『雅礱江下游考察報告』(1983)と『雅礱上游考察報告』(1985)を報告した。
- 8) 羌系文化の共通要素としては, 言語, 石碉, 白石信仰, 「クルジ」型の石塔などがあげられる。孫宏開 [1983, 1986] や楊嘉銘 [1988], 松岡 [1990, 1993] に詳しい。
- 9) 「土司制度」とは, 現地の民族集団の首領が中国王朝から官職を授けられて「土司」となり, 土地と住民を統治するという形をとるものである。ギャロン地区は, 明代には18の土司に分割された。すなわち明正 (以上は現在の康定県)・冷辺・沈辺・魚通 (以上は現在の道孚県)・穆坪 (現在の宝興県)・革什巴・巴旺・巴底 (以上の3つは現在の丹巴県)・綽斯甲・促浸 (以上は現在の大金県)・贊拉 (現在の小金県)・沃日 (現在の小金県, 贊拉とあわせて清代には「懋功県」)・党壩・松崗・卓克基・梭磨 (以上は現在の馬爾康県)・雜谷 (現在の理県)・瓦寺 (現在の汶川県)である。このうち前の4つの土司地区は, 後の14の土司地区と使用言語が異なる。すなわち前者がカム方言及びチベット語の方言であるのに対し, 後者の住民はギャロン語を用いる。故にギャロン地区については一般に後者のみを「嘉絨十四土司」とよぶ。伝説によれば, 14の土司の中では綽斯甲が最も早くその地に移って来たといい, およそ唐代前後に遡る。またギャロン族土司の祖先は, 仙女が星の光に感じて孕んだ大鵬の斑 (或いは黒)・白・黄の三色の卵から生まれたともいう。なおギャロン人の多くは, ラサの西北の琼部三十九族の出身であり, 土地が貧しく, 人口が多すぎたために今の土地に移ってきたと伝えられている (『嘉絨藏族調査材料』pp16~18)。土司制度は, 大小金地区以外は, 中華人民共和国が成立して土地改革が始まるまで続いた。ただし土司は, 中国王朝に対しては年に一度の特産物の献納や戦争時の徴兵を義務づけられているだけで, 実質的にはそれぞれが独立国の状態にあった。
- 10) 金川事変は, 大金川の土司サラホンが, 周辺土司の領土を占拠しようとしたことに端を発する。土司による間接統治を行っていた清朝はそれを反逆とみなし, およそ30年にも及ぶ戦いとなった。戦いは, 乾隆11年 (1746)と3年 (1768)に大規模な戦闘があり, 41年 (1776)にようやく平定された。しかしこれによって清朝側も莫大な戦費の支出を余儀なくされ, 兵10万のうち死傷者は6万に達したという。『清代四川史』[1991, pp310~404], 『平定両金川途略』[1925], 『嘉絨藏族調査材料』[1984, pp7~8, pp48~50], 松岡 [1991, p80] 参照。
- 11) 理県の甘堡屯・雜谷屯・上孟薫屯・下孟薫屯・九子屯の5屯をいう。理県は, 明代永楽年間に雜谷土司が「安撫司」を受けて以来その領地であったが, 乾隆17年 (1752)土司のツアンワンが清朝に反抗して鎮圧されてからは, 五屯が設けられ, 各村の「頭人」(土司の配下の

中で一番上の位の者)から「守備(屯区の中で最高位)」が選ばれた。

- 12) 土司時代の卓克基は、現在の馬爾康県の本真郷と卓克基郷の地域である。中華人民共和国成立初期の統計によれば、所轄の総戸数は2807戸、総人口は11967人で、3つの半農半牧地区(督部・茶舗・四大覇)と1つの牧畜区(草地六寨)が含まれ、合わせて大小47の集落を教えた。「四土」地区の中でも大土司の一つであった。現在の卓克基郷は、かつての官寨(土司の住居及び役所)周辺の3つの村だけをいう(周明録, 1988, p1)。
- 13) ギャロン人にはもともと商取引の習慣は無い。しかし漢族地区と隣接していた大小金川や文川、理県などの諸地域では、比較的多数の漢族が県城内や街道沿いに集中して居住していたため、定期市があった。「四土」地区では、自給自足型の経済が長く続いていたため、民国初期においても市場の形成には至っていなかった。1920年代頃から「四土」でもアヘン栽培が盛んになり、漢族のアヘン商人が長期にわかって住み着くようになって、漢族地区との往来も次第に増えていき、梭磨の馬塘や卓克基の馬爾康にはアヘン市場がうまれて繁栄した(西南民族学院民族研究所編, 1985, p213)。
- 14) 1992年度版『中国民族統計』によれば、阿壩藏族羌族自治州の県別の農村社会の総収入はつぎのようである(単位は元, 1994年は1元が約12円)。汶川808.4, 理県888.6, 茂県674.8, 黒水575.3(以上チャン族地区), 馬爾康915.3, 小金555.5, 金川649.6(以上ギャロン・チベット族地区), 松潘652, 若爾蓋824.5, 紅原863.8, 阿壩894.4, 壤塘471.3(以上草地チベット族地区)。
- 15) 郷内には、1985年までに建設した5000ワットの発電所があって、年間10万元の収入がある。また省内でも有数の原生林を利用した郷経営の木材工場があり、それを成都や四川の各都市、ラサなどに運ぶ長距離輸送などに従事する者が、1986年ですでに83人いる。1991年における大型トラックは13台、小型トラクターは142台でほぼ2軒に1台の割合で普及している(周明録, 1988, p1)。トラクターは薪・木炭・砂石・瓦・日用品などを県域との間を往復して運び、一人当たり1日30~40元の現金収入を得る。
- 16) ギャロン人には、もともと漢族式の「姓氏」はなく、それぞれの家屋に名前がある。漢語では「房名」である。「房名」は、その家庭の社会的地位、すべての権利や義務(土地の所有、税、労役、債務など)を表す。家屋及び「房名」は子孫に引き継がれる。一家が絶えて別の家庭が引き継ぐ場合には、「房名」を変えなければならないが、それに付随する権利や債務などはすべて引き継ぐことになる。支配者階級の「房名」は、領地の名とされることがある。「四土」の卓克基や松岡などがその例である(李紹明, 1987, p9)。卓克基郷納足村には、衣領・巴珍布・若落・俄珍・俄布・大窩・木羅西などの「房名」がある。分家してできた家庭は、呻金木先のような関連した名をつける。理県や汶川、大小金県のような漢族との接触が多い地域では、ギャロン名と漢名を併用している。
- 17) 「四土」では、現在もチンクー麦を炒った粉に酥油をまぜたツアンパを食べ、酥油茶や磚茶を飲む。大小金川では、チンクー饅饅(チンクー麦粉を餅状に焼いたもの)もよく食べる。

汶川や理県ではトウモロコシを栽培し、粉を餅状に焼いて食べる。ここでは酥油を使用する習慣はみられない（1994年筆者調査）。近年は、経済状態の向上とともに米を主食とするようになった。チンクー麦からはチンクー酒を作る。チンクー酒は儀礼や社交上の必需品で、チンクー酒は土瓶に作り、飲む時には少量の水を瓶の口に柄杓で注ぎ、竹の管を挿して吸う。

- 18) サンショウは、東隣のチャン族地区では清朝頃から特産物である。近年は品種改良が進んで、高品質のサンショウの生産に成功し、茂県渭門郷永平村では、サンショウ生産農家に何軒もの「万元戸」が出現した。しかし高度が2000メートルを越えるにつれて、品質が低下し、卓克基郷では1991年に試験的に栽培されたサンショウやクルミが、霜害のために全滅した。
- 19) 漢方薬材には、冬虫夏草・貝母・羌活・大黃などがある。1991年、小金では貝母が1斤で45～50元、羌活が2元で取り引きされていた。4月から8月までの間、1回について十日前後の時間をかけて山に入り、一人あたり約1000元の収入を得る。近年は、特に日本からの需要の多い松茸を7～8月に取りに行くという。
- 20) 上孟郷で最も高度の高い木尼村（海拔2500メートル）は、戸籍上はほぼ全員がギャロン人であるが、住民の話では、彼らの曾祖父や祖父の多くは、資中や安岳などの南の貧しい漢族地区から漢方薬材の採集やアヘンを栽培するためにやってきて、そのまま住み着いたのだという。ギャロン人地区としては珍しい例であるが、住民の姓名はすべて漢族式で、主要な姓は楊・賈・何・劉・李であった。しかし現在の住民たちは村内ではすべてギャロン語を話し、自分たちはギャロン・チベット族だと自ら語っている。
- 21) [周明録, 1988, pp 3～5] は、農民は自給自足型の農業を重視するばかりでなく、農牧業生産への再投資の意識や科学的な知識も欠如していると指摘する。トラクターを購入する経済力はあっても、農具は昔ながらのものを使用し、依然として「二牛抬扛（2頭の牛で1本の犁を引かせる）」を続けている。また国家から支給された化学肥料は、自分達は使わずにほとんどもを外部の漢族に売り渡している。家畜の病気や虫害鼠害に対しても、しばしばラマ僧を招いて「揪煙煙」を行う。
- 22) 『阿壩藏族羌族自治州文化芸術誌』[1992, pp.283～284] による。
- 23) [西南民族学院民族研究所編, 1985, p.99～101, pp.117～118], [李紹明, 1987, pp.9～10] 参照。
- 24) 『嘉絨藏族社会情况調査』[1985, pp.237～240] 参照。
- 25) [前掲論文, pp.238～239] によれば、汶川県の「啞巴会」は4月13日から15日にかけて行われ、15日には不飲不食で口も開かず、寺院のマニ車を回して叩頭する。参加しない者は、罰として酥油か茶を1斤、或いはチンクー麦を1斗供出して酒を作り、皆に振るまわなければならない。「啞巴会」は一般に年に1回であるが、松岡では月に1回、大金では4月13日と6月4日に行われる。
- 26) 丁世良ほか編 [1991] によれば、「牛王誕」はかつて四川省内のほとんどの漢族地区の農村で行われていた行事であり、貴州省や雲南省の一部地域でも盛んであった。チャン族につい

- ては、[松岡, 1994, pp.162~163] に詳しい。
- 27) 『羌族調査材料』[1984, pp.139~143], [松岡, 1993, pp.49~51] に詳しい。
- 28) [山口, 1987, p.319] による。
- 29) マニ塚は、チベット地区の山頂や村の出入り口などにしばしばみられる。高さ1~2メートル、底辺1メートル前後の方形の石積みの塔で、上部は円錐型になっているものが多い。タルチョがはためき、人々が通行する際に積んでいった小石が思い思いに置かれている。理県蒲溪村のチャン族は「ナヘシ（クルジ型の石塔）」のことを「嘛尼（マニ）堆」ともよぶ。形状的に「クルジ」に極めて似ており、その意味から考えてみても、山の神を祭るための「クルジ」がチベット仏教の影響を受けて、或いは融合して形作られていったものではないかと推測される。
- 30) 「六江流域」のチベット族のうち、大渡河下流と雅礱江下流の地域、すなわち四川省西南部の漢源・石棉・甘洛・越西・喜徳・塩源・木里・西昌・九龍などの県内に居住するチベット族を「河西南蔵族」と呼ぶ。ここには、ナムイ・パムイ・タシュ・リル・ロスー・ムニラ・シュミ・アルスーなどの異なる自称をもつチベット族がいる（何耀華, 1991, p.6）。彼らは本文中に既述したように、2つの大河流域の先住民だと考えられる。
- 31) [何耀華, 1983, pp.22~23] による。
- 32) チャン族の「ラシ」・「ウルピ」・「ラ」については、[松岡, 1993, pp.44~49] による。
- 33) [西南民族学院民族研究所編, 1985, p.102] による。
- 34) 「羌戈大戦的伝説」（茂汶羌族自治县文化館 1987『茂文羌族自治县民間歌謡集成試料』巻39）、「羌戈大戦的伝説」『朵爾都』（四川阿壩州文化局, 1988, 『羌族民間故事集』などがある。
- 35) 『西南辺境』
- 36) 『嘉絨蔵族社会状況調査』[1985, pp.238~239] による。
- 37) [阿壩州文化局編, 1992, p.62] による。
- 38) ギャロン・チベット族は鍋庄舞を「達爾嘎（ダアルグ）」と呼ぶ。「達爾嘎」はギャロン語の音に漢字をあてたもので、理県上孟郷では、これを「ダアルグェ」とも聞こえる音で呼んでいた。
- 39) 星野紘「手を連ね足を踏む踊り」（『民俗芸能研究』5号, pp.43~45, 民俗芸能学会, 1987）
- 40) 前掲論文, p.45参照。このような広範な地域にこの踊りが波及した理由はいろいろな側面から考えられる。概略的にいえば、とくに宗教的な背景を持たず、いつでもどこでも踊れ（特別な衣装も道具もいらない）、老若男女だれでも参加でき（参加資格はない）、集団で踊れ（小集団、大集団でも可）、踊りの所作・形式が比較的簡単で、かつ初心者でも周囲の人の所作に合わせて踊ることができ、自ら歌を歌って男女で踊るので楽しいというようなことが、多数の民族間に定着した理由であろう。
- 41) 白馬チベット族の「圓圓舞」については、松岡・高山「桃源境の鬼払い」（季刊民族学55, pp.38~50）に報告しており、チャン族の「沙朗」については、松岡「羌族の山の神祭り」

(日中文化研究 4, pp.43~53) でふれている。

- 42) 花嫁の家では、居間奥の中央の壁面に祭壇が設けてあり、祭壇の前が鍋庄舞の中心となる。その前に立つのは長老で、次に年長者、そして若者、年少者と年齢順に列に並ぶ。なおまた祭壇前は男女グループの境でもあり、祭壇に向かって右に男子、左に女子が位置する。外で鍋庄舞を行うときも同じで、中央に長老、年長者が立つ。鍋庄舞に参加する資格はとくにないのであるが、結婚式に際して花嫁、花婿の家で行う鍋庄舞は親戚縁者や年長者、友人などが主体となる。なお、上孟郷にいる修行僧を含めて50人ほどのラマ僧は鍋庄舞には加わらない。
- 43) 「饅饅 (ゲネ)」は布の袋に米を入れて、その上を「カタ (kha-btags)」の白布で覆ったもので、上部は凹型になっていて、角状の部分に飾りものがついている。
- 44) チベット仏教は次のような5派に大別される。紅教、黄教、白教、花教、黒教である。ギャロン・チベット地区はもともと黒教が勢力をもっていたが、金河事変で土司に加担して負け、黄教が力をのばした。
- 45) この3番のほかに①ガゼンザー②デュエンツェ③ナムチェンナムチェ④チンビエ⑤グルチャンビア⑥ロンスツォン⑦サンデォル⑧シェスシャム⑨チョーディ⑩チャムチェンムアがある。
- 46) この法会の仮面舞踊で用いる楽器はドンマル、デリ、ボツァルのほかにツォン (これは漢語で銅鑼)、ザンドン (トンマルの小型のもの)、デルボ (皮太鼓)、ズブ (鈴)、デル (デンデン太鼓と同じ形態で柄のないもの)、ドンサ (鈴の1種) などがあるというが、デルボやデルなどは踊る者が持つ楽器であると思われる。
- 47) [写真加藤敬, 解説塚本佳道, ツプテン・パルダン, 1984, pp.74~77, p.164] 参照。
- 48) Festival Program “THIMPHU TSHECHU”, BHUTAN TOURISM CORPORATION, 1988.
- 49) 写真加藤敬, 解説塚本佳道, ツプテン・パルダン前掲書, P.74。
- 50) 前掲書, pp.65~69。
- 51) ツプテン・パルダン前掲書, pp.95~99。

### 〔参考文献〕

阿壩州文化局編

1992 『阿壩藏族羌族自治州文化芸術志』巴蜀書社

阿壩藏族自治州概況編写組

1985 『阿壩藏族自治州概況』四川民族出版社

邊政設訂委員会編

1940 a 「理番概況資料輯要」

1940 b 「懋功概況資料輯要」

1940 c 「馬爾康概況資料輯要」(以上『川康邊政資料輯要』)

鄧廷良

1985 「明正土司考察記録」『雅砻江上游考察報告』 pp.28～54格勒

1988 「古代藏族同化，融合，西山諸羌与嘉絨藏族的形成」西藏研究1988— 2 pp.22～30

何耀華

1983 「冕寧県聯合公社藏族社会歴史調査」『雅砻江下游考察報告』 pp. 1 ～37

1991 「川西南藏族的信仰民俗」中国民俗研究通信 8， pp. 6 ～13

林繼富

1990 「藏族白石崇拜探微」西藏研究1990— 3 pp.138～146

李紹明

1980 「唐代西山諸羌考略」四川大學學報1980— 1

1987 「四土嘉絨藏区社会調査」四川民族史志1987— 1 pp. 1 —10

馬長寿

1943 「嘉絨民族社会史」民族研究叢刊 3

1942 「川康民族分類」邊疆研究通信 1 ～ 3

松岡正子

1990 「羌族研究の動向」中国民俗研究通信 7， pp. 2 ～ 7

1991 「石碉—ギャロン・チベット族の巨塔」季刊民族学53， pp.38～50

1993 「羌族の山の神祭り」『日中文化研究』 4， pp.43～53

1994 「チャン族の羌暦年—理県蒲溪郷大蒲溪村の事例を中心として—」

『儀礼・民族・境界—華南諸民族「漢化」の諸相』 pp.143～174

長野泰彦

1984 a 「嘉絨語の動作の様態を示す接辞」国立民族学博物館研究報告 9 — 3 pp.484～519

1984 b 「嘉絨語の人称接辞」国立民族学博物館研究報告 9 — 4 pp.711～745

孫宏開

1983 「川西民族走廟地区的語言」『西南民族研究』

1983 「六江流域的民族語言及其系属分類」民族学報1983— 3

ツプテン・パルダン，写真加藤敬，解説塚本佳道

1984 『マンドラ群舞』平河出版社

四川省編集輯組

1985 a 「嘉絨藏族社会情况調査」 pp.178～257

1958 b 「卓克基土司統治地区調査」 pp.258～270

1958 c 「理県社会調査」 pp.371～377

(以上『四川省阿壩州藏族社会歴史調査』)

王建康

1989 「嘉絨藏族的成因」西藏研究1989— 3

謝継勝

1989 「蔵族的山神神話及其特征」 西藏研究1989-4 pp.83-97

西南民族学院民族研究所編

1984 a 『嘉絨藏族調査材料』 (内部資料)

1984 b 『羌族調査材料』

山口瑞鳳

1987 『チベット上』 東京大学出版会

1988 『チベット下』 東京大学出版会

周明録

1988 「馬爾康県卓克基郷社会経済調査」 民族論叢 6 pp.1-7

王建康

1911 『清代四川史』 巴蜀書社

#### 新刊紹介

諏訪春雄・川村湊編著

### 『アジア稲作民の民俗と芸能』

本書は1993年10月23、24日の両日開催された学習院大学東洋文化研究所のアジア文化研究プロジェクトの第二回公開講演とフォーラムの内容を整理した上で収録、構成されている。第一回の記録は『倭族と古代日本』という題ですでに刊行されているので既知の人も多いだろう。日本人の日本人論好きは周知であるが、日本文化の源流を中国の少数民族の民俗文化に比定する論が照葉樹林文化論など学術的な議論に基づいたものから、旅行記的なものまで盛んに行われてきた。そこには、現代の日本人が弥生文化をそのままの形で継いでいるのではないことは自明なのに、相手の文化は古来からの形を残しているのかのような歴史的考察を欠いた視点がしばしば見られた。稲作を日本の民族文化の基調におく柳田民俗学にあっては稲作の伝来と展開は『海上の道』に示されるように、この学の基盤となる問題であったが、その後、民族形成・稲作文化に対して、民俗学からする発言は後退していた。しかし、近年、アジアの視野から日本の民俗を見直す動向が出てきた。

さて、本書もその一つだが、内容は国分直一

「稲作の文化の道一わが古層の稲作をめぐる民俗とのかかわり」を基調論文として、廣田律子「中国・江西省の追難行事」、萩原秀三郎「射日神話と立竿祭祀からみた稲作の系譜」、諏訪春雄「日中稲作芸能の比較」、依田千百子「朝鮮半島と日本のシャーマニズムの比較」、權又根「秦氏と稲荷」、宮田登「日本における渡来系の民俗と芸能」、川村湊「傀儡子と社堂牌一日韓の比較芸能史の試み」、金両基「韓国仮面舞劇のテーマと構造について」からなり、巻末にはこれらの発表に対して、沖浦和光、崔吉城、曾紅、前田憲二氏のコメントが収録されている。

大学の公開講演、またその刊本化で、学術の成果と国民が会合する一つのよきモデルを本書は示している。徳丸の田遊び、八戸のエンブリ、韓国の古典舞踊も当日には披露されたという。アジア諸民族の民俗文化をこのような形で社会に紹介していくのも大学や研究者の意義ある仕事と思われるのである。(佐野 賢治)

B6判 325頁 雄山閣出版  
1994. 7月刊 2,800円